

ツールを使いこなす力

石坂 浩一

数年前、全カリ総合の授業「朝鮮半島と日本」を担当して、日本軍「慰安婦」の問題を取り上げた。韓国の筆者が日本の論調について引用し、それについてコメントをしている文章をプリントとして配布し、それを読んで感想を書いてもらった。その時の反応はかなり驚くべきものだった。

その前の回にNHKの1990年代に製作されたドキュメンタリーを見せていた。日本軍の深い関与について歴史的資料をもって確認し、被害者の受けた傷跡を見つめようとする内容だった。その上で文章を読んだのだが、学生たちの感想には「韓国人で慰安婦は存在しなかったという人がいて驚いた」「この前に見たドキュメンタリーと方向性が全然ちがっていて困惑した」といったものが、100名そこそこの講義の中で1名2名ではなく20～30名出てきたのである。

韓国人の筆者は、韓国側が一般に考えている日本人の認識について、修正すべき点があると指摘しつつ、しかし日本では「慰安婦は存在しない」などといった保守的な意見が勢いを得ている現実を紹介した。ところが、少なからぬ学生たちは、日本の保守的な見解を紹介している文脈を筆者の主張だと読み違えているのである。もちろん、正確に読み取っている学生の方が人数では多かった。とはいえ、学生たちの中には文章を着実に読むということさえできない者が少なくないという事実が、確認されてしまった。

その後も、私が授業をしていて語った趣旨と正反対に学生が受け止めているケースをしばしば経験してきた。白か黒かといったはっきりした立て方で説明するとさすがに誤解はないが、世の中さまざまな面を総合的にとらえて把握する力がなければ対応できないし、そうした力を養うのが大学であると思う。

落ち着いて相手の言葉を聞き、書かれていることを読む。その上で、自分の頭でよく考える。そうした基本的な姿勢を身に付ける必要があるのは、さまざまな学習ツールが発達しても、同じことだろう。むしろ、大量の、手軽な情報に溺れやすい状況の中でこそ、落ち着いて考えるということが、教育においても社会においても大切になってきているのではないかと感じさせられる。

いしざか こういち

(本学異文化コミュニケーション学部准教授/
全学共通カリキュラム運営センター教育研究・広報委員/
諸言語教育研究室主任)